



Title	理学療法士・作業療法士養成課程を併設する国公立大学医学部附属病院リハビリテーション部における臨床実習の現状と課題
Author(s)	上野, 武治; 大宮司, 信; 高橋, 正明; 飯坂, 英雄; 八田, 達夫
Citation	北海道大学医療技術短期大学部紀要, 8, 1-14
Issue Date	1995-12
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/37601">http://hdl.handle.net/2115/37601</a>
Type	bulletin (article)
File Information	8_1-14.pdf



[Instructions for use](#)

原 著

# 理学療法士・作業療法士養成課程を併設する国公立大学医学部 附属病院リハビリテーション部における臨床実習の現状と課題

上野 武治・大宮司 信・高橋 正明\*・飯坂 英雄\*・八田 達夫\*\*

## Current Situations and Problems of Clinical Practice for the Physical Therapy and Occupational Therapy Students in the Rehabilitation Units of the Affiliated National and Prefectural University Hospitals

Takeji Ueno, Makoto Daiguji, Masaaki Takahashi\*, Hideo Iisaka\*  
and Tatsuo Hatta\*\*

### Abstract

We studied current situations and problems of the clinical practice for the physical therapy and occupational therapy students in the rehabilitation units of the 15 affiliated national and prefectural university hospitals, including the medical hospital of Hiroshima University started as first four-years college education of physical therapy and occupational therapy in Japan.

As a result, it was clarified that the manpower and facilities of these units had been so poor that number of the students received for the clinical practice had been also very few, especially in the division of occupational therapy. Furthermore, the number was about half as many as the one in the private university hospitals with department of rehabilitation medicine.

Countermeasures by the educational authorities are severely required to establish and fill up the system of medical rehabilitation in these affiliated university hospitals, in order to radically improve the clinical education for the physical therapy and occupational therapy students.

---

北海道大学医療技術短期大学部作業療法学科

\* 北海道大学医療技術短期大学部理学療法学科

\* \* 広島大学医学部保健学科作業療法学専攻

Department of Occupational Therapy, College of Medical Technology, Hokkaido University

\* Department of Physical Therapy, College of Medical Technology, Hokkaido University

\* \* Department of Occupational Therapy, Institute of Health Sciences, Hiroshima University School of Medicine

## 要 旨

初の4年制大学である広島大学を含め、大学・短大理学療法士・作業療法士養成課程の臨床実習の現状と課題を明らかにする目的で、全国15の国公立大学医学部附属病院リハビリテーション部を対象に調査を行った。

その結果、理学療法士は全病院に配属されているものの平均3.1名であり、作業療法士は3病院では未だ配属されておらず、平均1.2名にすぎなかった。また、年間に受入れる実習学生は理学療法部門で6～7名、作業療法部門で3～4名であり、理学療法・作業療法学生への実習施設としてはきわめて不十分な状況にあった。こうした状態は広島大学においても同様であり、医療技術短期大学の医学部保健学科への4年制化が進んでいる今日、附属病院におけるリハビリテーション診療・教育体制を拡充し、実習施設として整備することは緊急に重要な課題である。文部省当局がこうした現状を十分に認識し、早急に抜本的な対策を行うことを強く求めたい。

## はじめに

われわれは、医学部附属病院（以下、附属病院と略）における理学療法学科・作業療法学科学生の臨床実習の改善・充実のための調査研究を行って来た<sup>4)</sup>。一部はすでに本紀要第7号で公表しているが<sup>5, 6)</sup>、それは実習を委託する国公立短大側から見た附属病院での臨床実習の現状と課題に関する検討とリハビリテーション（以下、リハと略）診療科を有する私立大学病院リハ部門での臨床実習に関する調査である。これらの調査で明らかなのは、国公立大学病院では短大教員も加わって様々な形態での実習が試みられてはいるものの、臨床実習施設として大きな限界を有することであった。

本稿ではこれら附属病院リハ部の現状調査と臨床実習担当者の意見に基づいて、臨床実習施

設として改善・充実する上での方策に関する検討を行った。

## 対象と方法

対象は、国公立大学短大で理学療法士・作業療法士養成課程を有し、理学療法士1名以上が配属されている全国15の附属病院リハ部または理学療法部である。

1993年10月に広島大附属病院を除くリハ部長宛てに調査票（資料）を送付し、1994年2月までに回収した。調査票は、リハ部の概要（院内の位置付け、専有病床の有無、職種と数）、理学療法部門と作業療法部門では保険認可ならびに臨床実習の状況（受入れの有無、臨床指導者数、受入れ学校数と学年・学生数、臨床指導者の意見など）に関する設問からなっている。

なお、1992年に4年制大学として発足した広島大では、当時まだ自校学生の臨床実習が開始されていなかったため調査対象から除外した。しかし、1995年4月から最終学年である4年次学生の臨床実習が開始されており、短大の4年制化を検討する上でも重要なため、同年6月に94年度・95年度の実習受入れ状況を中心に、上記と同じ項目で調査を行った。

## 結 果

広島大学を含め15附属病院の全てから回答を得た（表1）。公立は札幌大病院のみである。集計に際し、臨床実習を臨床指導者によって行われる実習に限定し、短大教官による授業としての見学実習や評価実習などは除外した。さらに、臨床実習の受入れは高橋らの報告<sup>5)</sup>との関連で92年度と93年度の2年間に限った。結果の解析は単純加算と平均によって行った。また、広大病院の結果は調査時期に2年間のずれがあるため、実習受入れに関しては項目を別にして検討し、他の項目は併せて検討した。

表1 調査対象の附属病院一覧

附属病院および部門の名称	略称
札幌医科大学医学部附属病院リハビリテーション部	札医大病院
北海道大学医学部附属病院理学療法部	北大病院
北海道大学医学部附属病院登別分院リハビリテーション部	北大分院
弘前大学医学部附属病院理学療法部	弘大病院
秋田大学医学部附属病院整形外科リハビリテーションセンター	秋大病院
群馬大学医学部附属病院草津分院リハビリテーション部	群大分院
信州大学医学部附属病院リハビリテーション部	信大病院
名古屋大学医学部附属病院理学療法部	名大病院
京都大学医学部附属病院理学療法部	京大病院
金沢大学医学部附属病院理学療法部	金大病院
神戸大学医学部附属病院理学療法部	神大病院
長崎大学医学部附属病院理学療法部	長大病院
鹿児島大学医学部附属病院理学療法室	鹿大病院
鹿児島大学医学部附属霧島病院リハビリテーションセンター	鹿大霧島病院
広島大学医学部附属病院リハビリテーション部	広大病院

1. リハ部の概略(表2, 3)

1) 病院内での位置づけ

中央診療部が10病院(67%)と最も多く、分院は北大と群大の2病院(13%)、整形外科所属は秋大と鹿大の2病院(13%)で、診療科は鹿大霧島病院(7%)であった。

2) 専有病床の有無

専有病床は札医大病院と鹿大霧島病院の2病院(13%)で有していたにすぎない。

3) 診療従事職種と数

医師数は兼任医師や医員の取り扱いが病院により大きく異なっていたが、少ない数がより実態に相応しく、鹿大霧島病院を除くとせいぜい1~2名であった。

理学療法士は全病院に配属されているが、非常勤職員も含めて4名の病院が最も多く、病院当たりの平均は3.1名であった。一方、作業療法士は未だ3病院(20%)には配属されておらず、

表2 リハビリテーション部の概要

項目	病院略称	札医大病院	北大病院	北大分院	弘大病院	秋大病院	群大分院	信大病院	名大病院	京大病院	金大病院	神大病院	長大病院	鹿大病院	鹿大霧島病院	広大病院
設立主体		公立	国立	国立	国立	国立	国立	国立	国立	国立	国立	国立	国立	国立	国立	国立
位置付け		中央診療部	中央診療部	分院	中央診療部	整形外科	分院	中央診療部	中央診療部	中央診療部	中央診療部	中央診療部	中央診療部	整形外科	診療科	中央診療部
専有病床数		10	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	50	-
職員数	医 師		3		1		1	2	2(1)	3	1	2(2)	1		12	2
	医 師 専 任 数	2	1		5		1	1	1	1	4	2(2)	1		12	2
	理学療法士	4	4	2	3	1	1	4	5(1)	4(1)	5	4	3	3	2	2
	作業療法士	2	2		2			1	(1)	1	2	2	1	1	1	2
	看護婦	*	1		1						1				22	1
	柔道整復士	4							1							
	鍼灸・マッサージ					2				(1)	2			1	1	
	言語療法士							(1)								
	ケース・ワーカー							1	(1)		1			1	6	
	事務職他				1			1	(1)				(1)	1	19**	

( ): 非常勤職員 \* 他科との混合病棟のため、専任の看護婦はいない。 \*\* 栄養士・放射線技師・検査技師・薬剤師など。

表3 理学療法士・作業療法士の配属数とその平均  
(非常勤を含む)

職種	人数						
	なし	1名	2名	3名	4名	5名	平均
理学療法士		2	3	3	5	2	3.2名
作業療法士	3	6	6				1.5名

\* 数値は、広大病院を含む附属病院数

非常勤職員のみ名大病院を含めて1名の病院は6病院(40%)もあり、病院平均で1.2名、配属されている病院では1.5名と、理学療法士の半数以下であった。

他のリハ関連職種では柔道整復士と鍼灸・マッサージ師は合わせて7病院に配属されているが、ケースワーカーは非常勤で1病院のみ、言語療法士は配属されていなかった。看護婦も鹿大霧島病院を除くと4病院での配属であった。

## 2. 理学療法部門 (表4, 5, 6)

### 1) 保険認可の状況

広大病院を含め、全てが「理学療法Ⅱ」であった。

### 2) 患者依頼の多い診療科

広大病院を含め、内科系では神経内科(12病院, 80%), 一般内科(10病院, 67%)の順で、それに循環器内科(5病院, 33%)と小児科(4病院, 27%)が加わっていた。外科系では整形外科(15病院, 100%)と脳神経外科(12病院, 80%)が大部分であった。

### 3) 臨床実習の受入れ

臨床実習は12病院(80%)で受入れていた。北大分院は以前の受入れて、群大分院では今後の受入れ予定はなかった。

表4 理学療法部門

項目	病院略称	札医大 病院	北大 病院	北大 分院	弘大 病院	秋大 病院	群大 分院	信大 病院	名大 病院	京大 病院	金大 病院	神大 病院	長大 病院	鹿大 病院	鹿大霧 島病院	広大 病院
保険認可		Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ
依頼診療科																
内科系	e, h	a, e, f	a	a, e, f	b, e, f	a, d	a, e, f	b, e, h	a, e, f	a, d, e	b, c, e	d, e, g	a, b, e	a, b, e	a, b, e	
外科系	e, f, g	a, e, f	e	b, e, f		a, e	a, e, f	b, e, f	a, e, f	d, e, f	b, c, d, e, f	d, e, f	d, e, f	a, b, e	a, e, f	
実習の受入れ	有	有	無	有	有	無	有	有	有	有	有	有	有	有	有	
臨床指導者数																
92年度	3	3	2	3	1		4	4		4	4	4	3	2	1	2
93年度	2	4	2	3	1	1	4	4		3	4	4	3	2	1	2
併設校の 学生数	総数各期の最大数															
	92年度		2:2					2:2	2:2	3:3				2:2	3:3	
	1学年															
	2学年				6:2	1		8:3	3:3	1:1	6:2	3:2	3:1	8	3:3	2:1
	3学年	3:4	2:2													
	計	3	4		6	1		10	5	4	6	3	3	8	2	
93年度			2:2					2:2	2:2				2:2	1:1		
1学年				6:2	2		4:2	3:3	4:2	6:2	3:2	3:1	2:2	1:1	2:1	
2学年	3:4	4:2											2:2	2:2		
3学年				6	2		4	5	6	6	3	3	5	2	3	
計	3	6		6	2		4	5	6	6	3	3	5	2	3	
他校受 入れ数・ 学生数	92年度	1	2		1				2				3		1	2
	93年度	1	2		1				2				3			2
	総数各期の最大数															
	92年度		1						4:2							
	1学年								3:2							
	2学年	3:2	3:2		1:1				7:3				9:3		1:1	2:2
3学年																
計	3	4		1				14				9		1	2	
93年度			1						3:2							
1学年									2:2							
2学年	4:4	2:2		1:1					6:3			9:3			2:2	
3学年	2:4															
計	6	3		1				11				9			2	
受入れ学生総計																
92年度	6	8		7	1		10	19	4	6	3	12	8	3	2	
93年度	9	9		7	2		4	16	6	6	3	12	5	2	5	

[依頼診療科] 内科系: a: 一般内科, b: 循環器内科, c: 消化器内科, d: 呼吸内科, e: 神経内科, f: 小児科, g: 精神科, h: 他  
外科系: a: 一般外科, b: 循環器外科, c: 消化器外科, d: 呼吸外科, e: 整形外科, f: 脳神経外科, g: 他

\* 94・95年度の学生受入れで, \*\*は4学年を指す。

表5 各附属病院の実習受入れ状況

部門・年度 項目	理学療法部門		作業療法部門	
	92年度	93年度	92年度	93年度
受入れ病院数	12	12	10	11
臨床指導者数 なし・棚	2	0	4	4
1名	2	3	7	8
2名	2	3	3	2
3名	3	3		
4名	4	5		
併設校の学年				
1学年	2	2	2	2
2学年	4	3	0	1
3学年	12	12	10	11
他校の受入れ				
1校	3	2	2	1
2校	2	2		
3校	1	1		1

\* 数値は附属病院の数を示す（広大病院を除く）

表6 学生の実習受入れ状況と平均人数

部門・年度 総数	理学療法部門		作業療法部門	
	92年度	93年度	92年度	93年度
1～2名	1	2	3	5
3～4名	3	2	6	4
5～6名	2	3		1
7～10名	4	3	1	
11名～	2	2		1
平均人数	7.3名	6.6名	3.3名	3.5名

\* 数値は附属病院の数を示す（広大病院を除く）

#### 4) 過去2年間の受入れ校数、学生数

##### ①臨床指導者数

実習指導が可能な経験3年以上の理学療法士は、92年度では「なし・記載なし」が2病院あったが、93年度では全病院におり、その平均は2.7名であった。

##### ②併設する養成校の臨床実習

1学年では各年度とも2病院ずつ、2学年では92年度4病院、93年度3病院であった。3学年は92・93年度とも12病院全てで受け入っていた。学生数は1・2学年で1～3名、3学年では弘大病院、信大病院、金大病院が6～8名と比較的多いものの、大部分で2～4名であった。実

習各期での最大受入れ数は、臨床指導者が複数の場合でもせいぜい2～3名であり、年間の受入れ学生数は多くてもせいぜい5～6名であった。

##### ③他の養成校の臨床実習

他の養成校は5～6病院で受入れており、平均2校であった。学年では1学年が2病院、2学年が1～2病院、3学年は5～6病院で、主体は3学年であった。学生数は1・2学年は2病院で1～4名、3学年は名大病院や長大のように6～9名と比較的多い病院もあるものの、大体は2～3名であった。実習各期での最大受入れ数は、併設校と同様1～3名であった。受入れ学生数は1名から14名までと病院差が大きく、名大病院や長大病院のように併設校の学生数以上を受け入れている病院も見られた。

##### ④受入れ学生の総数

受入れ学生総数の病院当たり平均は92年度7.3名、93年度6.6名であった。これは1名の臨床指導者が平均2～3名を指導していることになる。

##### ⑤広大病院における臨床実習

自校生の受入れは95年度から4学年3名で開始している。他校は94・95年度とも2校から3学年2名を受入れており、その総数は94年度2名、95年度は5名であった。臨床指導者当たりの学生数は他の病院とほぼ同じであった。

##### 5) 臨床実習上の問題点、改善・充実についての意見

寄せられていた意見の概略は表7に列記した。内容としては、スタッフや予算が少ないために十分な指導が出来ず、臨床指導者の教育業務が位置付けされていないこと、専有のリハ病床やリハ医学講座などのリハ医学教育・診療体制が確立していないために内容的に十分な実習が出来ないことなどの指摘であった。こうした点は広大病院も同様であったが、これらの意見はリハ医学講座やリハ診療科の設立を含め、マンパワーの充実や専有ベッドの確保など、短期的及び長期的なりハ部門の拡充を望む声と理解され

表7 理学療法部門からの意見

札幌大	①PTの定数増がない限り、実習の受け入れを断っている。②研究・教育は業務とされており、学生のロッカーや机等の予算要求も認められていない。
秋田大	①リハ医学講座が医学部にないため、リハ医やそれに代わる医師がおらず、リハ診療もないため病棟でもリハ・カンファレンスは行われていない。事務員もおらず、PTがその業務を行っている。看護婦など他職種との連携もとりにくい。部門の強化が必要だが、中央診療部への移行時期も不明である。②患者も外傷は少なく、悪性腫瘍や特定疾患、それに手術入院が多く、退院後の通院は少ない。③研究業務も加わるため、学生指導は負担。
群馬大	①職員増が困難な附属病院では、指導者への負担増は避けられない。一人職場での通常業務に加え、学生の指導や時間外での生活援助などは大変。②他施設への実習は学生にとり経済的負担が大きいので、併設病院での実習が望ましいが、希望者に平等に機会を与えることは困難。
信州大	病院の職員数が不足なため、短大教官との連携が必要。
名古屋大	PT・OTの数が少なく、場所も狭い。このため、動作分析などは短大の教官が附属病院の患者を用いて指導して欲しい。
京大	①スタッフ不足で臨床に追われ、充実した教育体制がとれない。②病棟がないため、リハ目的の入院患者もおらず、チーム医療が行えず、リハ医療の体験が困難。③技官にも教育やそのための研修等を業務に位置づけて欲しい。
金沢大	附属病院で全学生の实習が望ましいので、PT・OTを増員して欲しい。
神奈川大	①実習指導者会議への旅費が認められず、出席には有給休暇が必要なのが現状。②実習中、患者の治療中断や急な転院で長く担当できる機会が少ない。
長崎大	3年次の実習期間は短縮しているため、今後は1・2年次の実習が重要で、頻度を増す必要がある。そのためにも医短教官も患者を診ることが必要。
鹿嶋大	①検査と治療方針が決まれば患者はすぐ転院するため、卒論の指導が困難。②附属病院では診療領域の拡大と医師との共同、職員の増員、設備の拡大、他科や病棟とのより密な連携で、臨床実習でも多面的な経験が可能となる。
広島大	①学生指導など教育業務の役割が明示されていない。②職員数が足りない。

る。また、マンパワーが少ないため医短教官との連携協力を望む意見も見られたことも注目される。

### 3. 作業療法部門 (表5, 6, 8)

#### 1) 保険認可の状況

広大病院を含め、認可は11病院 (73%) で、全て「作業療法Ⅱ」であった。「精神科作業療法」と「精神科デイケア (大規模)」はそれぞれ1病院にすぎない。また、認可されていない理由は、作業療法士の未配属や施設面積の不足 (名大病院) による。

#### 2) 患者依頼の多い診療科

内科系では神経内科が最も多く (11病院, 100%), 次いで一般内科 (6病院, 55%), 循環器

内科 (4病院, 36%) の順で、外科系では整形外科と脳神経外科が大部分を占めていた (各10病院, 91%)。

#### 3) 臨床実習の受け入れ状況

臨床実習は未認可の名大病院も加え、12病院 (80%) で受け入れていた。

#### 4) 受入れの領域

全てが身体障害で、他には精神障害と老年障害が各1病院であった。

#### 5) 過去2年間の受入れ校数、学生数

##### ① 臨床指導者数

実習指導が可能な経験3年以上の作業療法士は大多数の病院で1名、2名は2～3病院にすぎなかった。

表8 作業療法部門

病院略称 項目	札医大 病院	北大 病院	北大 分院	弘大 病院	秋大 病院	群大 分院	信大 病院	名大 病院	京大 病院	金大 病院	神大 病院	長大 病院	鹿大 病院	鹿大霧 島病院	広大 病院	
保険認可	Ⅱ	Ⅱ 精神科OT	無	Ⅱ	無	無	Ⅱ	無	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ 精神DC(大)	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	
依頼診療科 内科系 外科系	e e,f,g	a,e,g e,f		e,f,g			a,e e,f,g	b,e h	e e,f	a,b,e b,e,f	a,e,f e,f,g	e e,f	e e,f	a,b,e	a,b,e e,f	
実習の受入れ	有	有	無	有	無	無	有	有	有	有	有	有	有	有	有	
	身障	身障		身障			身障	身障	身障	身障 老年	身障	身障 精神	身障	身障	身障	
臨床指導者数 92年度 93年度	1 1	2 1		2 2			1 1		1 1	2 2	1 1	1 1	1 1	1 1	1 1	
併設校の 学生数	総数各期の最大数															
	92年度															
	1学年		2:2		5:5											
	2学年															
	3学年	2:2	2:2		3:2		1:1	3:1		3:1	1:1	3:2	3:1	2:1	1:1	
	計	2	4		8		1	3		3	1	3	3	2	1	
93年度																
1学年		2:2		3:3												
2学年				4:4												
3学年	2:2	1:1		3:2		1:1	3:1	1:1	3:1	2:2	4:2	2:1	2:1	1:1		
計	2	3		10		1	3	1	3	2	4	2	2	1		
他校 受入れ数・ 学生数	92年度															
	93年度															
	総数各期の最大数															
	92年度															
	1学年				1:1							2:4				
	2学年															
3学年														1:1		
計				1						2				1		
93年度																
1学年				3:2							3:4					
2学年																
3学年														1:1		
計				3							3			1		
受入れ学生総計 92年度 93年度	2 2	4 3		9 13			1 1	3 3		3 3	3 5	3 4	3 2	2 2	2 2	

[依頼診療科] 内科系：a；一般内科，b；循環器内科，e；神経内科，f；小児科，g；精神科，h；他  
外科系：b；循環器外科，e；整形外科，f；脳神経外科，g；他

\* 94・95年度の学生受入れて、4学年の受入れはなし。

### ②併設する養成校の臨床実習

1学年2病院，2学年はせいぜい1病院で、ほとんどが3学年であった。学生数は1学年2～5名，2学年4名であったが，3学年は大部分が2～3名であった。また，実習各期での最大受入れ数は弘大病院の4名もあるものの，大部分が1～2名であった。年間の受入れ学生数は8～10名と多い弘大病院を除くとほとんどが1～3名であった。

### ③他の養成校の臨床実習

他の養成校の受入れは2病院のみ，1学年に限られていた。受入れ校数は1校と3校で，学生数は1～4名であった。

### ④受入れ学生の総数

受入れ学生総数の病院当たり平均は，92年度が3.3名，93年度が3.5名と理学療法部門の半数であったが，臨床指導者当たりの学生数はやはり2～3名であった。

### ⑤広大病院における臨床実習

自校の学生受入れは94年度3学年1名で開始しているが，これは臨床指導者による評価実習であり，4学年はまだ受入れていない。他校からは94・95年度とも1校から3学年1名を受入れており，その総数は各年度とも2名であった。臨床指導者当たりの学生数も他の病院と変わらなかった。



表9 作業療法部門からの意見

札 医 大	①附属病院にリハ医療の体制が整っていない。マンパワーも不足し、施設面積も不十分。診療・測定機器も不備で、各科の需要に応じられない。②職員は技術吏員の身分で臨床・教育・研究業務を行っているが、研究費や実習費もないなど困難な状況にある。附属病院のPT、OTも教員であることが必要。③現在の附属病院での実習には限界あり、将来の実習施設として保健医療センターの設置が望まれる。
北 大	職員数が少ないため、指導者の意見の妥当性を他職員に聞くことができず、カンファレンスでも1人の視点からしか参加できないことが大きな問題。
信 大	病院の職員数が不足しており、短大教官との連携が必要。
名 大	OT1人であり、施設・設備が極めて不十分。
京 大	①5週間以上の入院患者を得にくく、急性期の患者が多いため週ごとに状態の変化があり、学生にとらえにくい。また、退・転院が早く、実習期間通して担当できる患者が得られず、学生を担当させるにはリスクが大きいなど、病院として特殊。②他科や病棟との連携がとりにくい。そのため、チーム医療としてのリハの学習が行えない。③OTR1名のため、学生指導が行き届かない。学生指導に関する研修や講習など、教育の位置付けがなされていない。
金 大	PT部門に同じ。
神 大	①併設大学での実習指導者会議等への出席に旅費の支給がない。②急性期や難病など学校で学習していない症例が多く、学生にとまどいが大きい。
長 大	常勤OTR1名で身障の施設認可をとっているが、精神科デイケアとの兼務で、当初はこの勤務体制に合わせて全分野の実習を行ったが、現在は精神科のみで実施。そうなると指導者の目が行きとどかず、達成感の得られにくい実習となり苦慮している。しかし、機構上、比較的幅広い診療領域や多くの職種との関わりが得やすいなどの利点がある。
鹿 大	学生指導は非常に負担が重く、臨床と学生指導の両立は困難。
鹿大霧島	OT1名のため、臨床業務に追われ、学生の指導に手がかけにくい。
広 大	①職員数の不足。②設備が不十分（ADL室や検査・評価室がない）。

#### 6) 臨床実習上の問題点、改善・充実についての意見

その概略は表9にまとめた。内容的に理学療法部門と基本的に同様であるが、作業療法部門では広大病院も含め、マンパワーや施設・設備の点でより深刻な状態が反映されていた。

### 考 察

#### 1. 本調査結果に関して

今回の調査ではこれまで指摘されていたように<sup>4, 5)</sup>、広大病院も含めて理学療法士・作業療法士養成課程を有する国公立大附属病院リハ部は実習施設として著しく整備が不十分な状態にあることが確認された。それは機構上もいまだ中央診療部門に移行していない病院も存在し、診療科はわずか1病院にすぎないこと、作業療

法士の配属は未だ3病院なされていず、1名のみの病院が半数以上を占めていること、両学科とも学年定員が20名であるにもかかわらず、実習受入れ人数は理学療法部門で平均6～7名、作業療法部門にいたっては平均3～4名にすぎなかったこと、医学部内学科として発足した広大病院においても全く同様な状況に置かれていることなどである。

1993年8月に行われた全国42の国立大学病院リハ部に関するアンケート調査でも<sup>3)</sup>、基本的には同様の問題が指摘されていたが、作業療法士に関しては未だ4割の病院では配属されていないなど、より深刻な状況が明らかにされていた。今回の調査では理学療法士、作業療法士の病院当たりの平均数は各々3.1人、1.2人であったが、唯一診療科で専有病床を有する鹿大霧島

病院でさえ理学療法士2名、作業療法士1名の配属にすぎなかったこともあらためて注目される。1990年の大学病院リハビリテーションセンター連絡会議による国公立の全国91附属病院の調査<sup>1)</sup>では、理学療法士は平均5.43名、作業療法士は2.01名であった。今回の調査ではより少ない数が示されたが、これは養成課程を有する附属病院のスタッフ数であることを考慮するときわめて重大な問題と言わざるを得ない。一方、先に報告したりハ診療科を有する11の私立大学病院<sup>6)</sup>では、理学療法士が平均9.9名、作業療法士も4.6名が配属されており、これらの病院に併設する養成校は1校のみであるが、実習学生の受入れは理学療法部門で平均12.9名、作業療法部門でも同6.1名であり、今回調査の約2倍であった。

以上の諸結果は、国立大学の医療技術短期大学部（以下、医短と略）に理学療法学科・作業療法学科が設置されてすでに十年以上を経過しているにもかかわらず、併設の附属病院がこれら学生への実習施設として全く整備されていない実態を物語るものである。

## 2. 4年制大学化との関連

わが国では理学療法士・作業療法士の養成は1992年に広島大学で初めて4年制大学教育が開始されたが<sup>2)</sup>、その後1993年には札幌医大が短大から4年制学部へ昇格するなど、専修学校も含め4年制教育の方向に急速に進みつつある。また、国立医短においても、神戸大をはじめ徐々に4年制へ昇格して医学部の保健学科へと改組されつつある。こうした方向はこれまで以上に附属病院との関係がより重要になることを意味する。すなわち、附属病院の位置付けが従来の医学教育（医師養成）に加えて、保健学科内職種の養成施設としての役割が明示され、その結果医短の実習施設の時期とは大きく変わるからである。したがって、附属病院リハ部も理学療法・作業療法学生の実習施設として抜本的に整

備されるべきことはいうまでもない。その具体的な方向は、臨床指導者から寄せられた意見に示されているように、臨床指導に関わる職員の大幅な増員と施設の整備、専有病床を有する診療科の設置によるリハ診療体制の確立、医学部でのハ医学講座の設置など、教育・研究・診療体制などの確立につきるものである。しかし、今回の調査で明らかになった大きな問題は、医学部内の学科として充足し、臨床実習がすでに開始されている広大病院リハ部ですらほとんど整備されていないことである。したがって、医短の4年制化による医学部への改組が進んでも附属病院リハ部の現状は放置され、一般医療機関にその大部分を委託する現行の実習方式は変わらない危険性が強く憂慮される。医短内の看護、衛生技術、診療放射線など3学科の臨床実習は附属病院でその大部分が実施されている状況と比較しても<sup>4)</sup>、学生や一般病院の臨床指導者にも過大な負担を強いている現行の実習方式は早急に改善されなければならない。

北大では登別に設置されていた医学部附属温泉研究施設がリハ医学講座として医学部内に1994年に改組・移転され、分院の移転・改組も計画されているが、この方向こそリハ医学教育・研究・診療の確立のためにも最も望まれるものである。しかし、中でも重視されるべきことは理学療法士・作業療法士の大幅な増員による実習体制の整備であり、文部省当局には現状の問題点を深く認識し、抜本的な対策を行うことが強く要求される。

## ま と め

広島大学を含む国公立大学・短大で、理学療法士・作業療法士養成課程を有する全国15の医学部附属病院のリハ部および実習学生の受入れ状況を調査し、臨床指導者からの意見を参考に今後の改善・充実に関する検討を行った。

1. 院内の機構として多くが中央診療部であるが、整形外科所属が2病院もあり、診療科は

1 病院だけであった。勤務する理学療法士は平均3.1名、作業療法士は1.2名にすぎず、作業療法士は未だ3病院で配属されていない。

2. 過去2年間に受け入れた実習学生は、理学療法部門で6～7名、作業療法部門で3～4名であり、両部門とも臨床指導者当り2～3名程度であった。臨床指導者からは、職員数の不足やリハビリ診療体制の不備、教育業務の位置付けがないことなどが問題として寄せられており、初の4年制医学部内学科として発足した広大病院も同様な状況にあった。

このような附属病院の現況は実習施設としてもきわめて重大であり、文部省による早急かつ抜本的な対策が要求される。

稿を終えるに当り、本調査にご協力をいただいた各病院リハビリテーション部の皆様に深く御礼申し上げます。

本研究は1993年度文部省短期大学教育方法等改善経費によって行われた。

## 文 献

- 1) 大学病院リハビリテーションセンター連絡会議：リハビリテーション医学教育および大学病院におけるリハビリテーション診療に関する第4回調査(1990年)。リハビリテーション医学, 28(4): 251-256, 1991.
- 2) 畑野栄治, 梶原博毅：理学療法士・作業療法士養成の現状・問題点と4年制大学での教育計画。総合リハ, 20(7): 579-582, 1992.
- 3) 加倉井周一：国立大学病院におけるリハビリテーション診療及び医学教育における現状－アンケート調査結果－。国立大学病院理学療法部・リハビリテーション部門会議資料, 1993, 東大教材出版, 東京.
- 4) 1993年度教育方法等改善経費研究成果報告書(研究代表 上野武治)：医学部附属病院における理学療法学科・作業療法学科学生の臨床実習の改善・充実のための調査研究。1994, 北海道大学医療技術短期大学部, 札幌.
- 5) 高橋正明, 飯坂英雄, 鈴木重男, 上野武治, 村田和香, 大宮司 信, 丸谷隆明, 八田達夫, 高橋憲一：国公立医療技術短期大学理学療法学科および作業療法学科の、併設する医学部附属病院における臨床実習の現状と課題。北海道大学医療技術短期大学部紀要, 7: 11-26, 1994.

資料

アンケート（１）（貴部門について）

（設問２は該当するものに○印を、（ ）内には具体的な記載をお願いします。）

貴部門の正式名称：（ ）

- 1 平成5年9月1日現在の貴部門の病院内の位置づけ（中央診療部か、診療科か、分院かなど）についてお教え下さい。
- 2 貴部門として専有の病床をお持ちですか  
 a 無                      b 有：病床数（ ）
- 3 貴部門の職員数につきお教え下さい（カッコ内に経験3年以上の職員の数をご記入下さい）。

	職 員 数			職 員 数	
	定 員 数	専任職員数		定 員 数	専任職員数
医 師			柔道整復士		
理学療法士		( )	鍼灸・マッサージ		
作業療法士		( )	言語療法士		
看護婦・士			ケースワーカー		
事務職					

上記以外のスタッフがおられましたら、その職種、人数を以下にお書き下さい。

場合によりましては、記載いただいた内容につきまして、あらためてお伺いすることも出てくるかと存じます。このアンケートをお書き下さった方のお名前などお知らせ下さると幸いです。

ご記入下さった方のお名前：

電話連絡先：

アンケートのお願い

秋を迎えまして、貴会におかれましてはますますご清祥のことと存じます。医療状況の変動期にあたり、リハビリテーション領域がますます重要性を増す今日の頃でございます。

さて、この度私どもは文部省の援助（平成5年度短期大学教育方法等改善研究経費）を得まして、

「医学部附属病院における理学療法・作業療法学科学生の臨床実習の改善・充実に関する調査研究」

という調査研究を行うことになりました。これはPT・OTの養成にあたっております私どもが、カリキュラムの中でも特に重要な臨床実習を引き受けていただいている附属病院の充実・発展を願う立場から企画されたものであります。

今回その一環として、「大学・短大等に併設する医学部附属病院におけるリハビリテーション部門の現状」につきお伺い申し上げたく、アンケートを計画いたしました。お忙しいところ誠に恐れ入りますが、このような意図をおくみ取りの上、何卒よろしくご協力のほどお願い申し上げます。

なおご記入いただきましたアンケートは同封の封筒にて11月10日までにご返送下さいませようお願い申し上げます。またアンケート内容につきまして何かご不審な点がございましたら、下記までお問い合わせ下さい。調査結果は後日何らかの形でご報告させていただきますが、その際は貴施設が特定されることのないようにいたします。

平成5年10月  
 研究グループ代表 上野 武治  
 〒060 札幌市北区北12条西5丁目  
 北海道大学医療技術短期大学部  
 作業療法学科教授  
 電話：011-716-2111（内）3331

アンケート(2) (理学療法部門について)

(設問1~4, 7で該当するものには○印を、他には具体的な記載をお願いします。)

1 貴部門で診療報酬の許可を受けているのは以下のどれに該当しますか。

- a 理学療法(I)      b 理学療法(II)      c 理学療法(III)  
d 理学療法(IV)      e その他( )

2 貴部門へ患者を依頼することの多い診療科を以下から内科系、外科系それぞれ各3つ選んで○をつけて下さい。

1)内科系

- a 一般内科      b 循環器内科      c 消化器内科  
d 呼吸器内科      e 神経内科      f 小児科  
g 精神科      h その他の科( )

2)外科系

- a 一般外科      b 循環器外科      c 消化器外科  
d 呼吸器外科      e 整形外科      f 脳神経外科  
g その他の外科( )

3 P T科臨床実習の受け入れについてお伺いします。

- a 受け入れている。      b 受け入れていない

4 (3でaとされた場合)この3年間の併設校の実習の有無を年次別・学年別内訳も含め、平成5年度も予定として含めご記入下さい。

	1学年	2学年	3学年
平成5年度	有・無	有・無	有・無
" 4 "	有・無	有・無	有・無
" 3 "	有・無	有・無	有・無

5 (3でaとされた場合)この3年間に受け入れた併設校以外の学校数(年次別・学年別内訳も含め)を、平成5年度も予定として含めお教え下さい。

	学校数	1学年	2学年	3学年
平成5年度				
" 4 "				
" 3 "				

6 (上記3でaとされた場合)この3年間の受け入れた学生数(学年別)と1度(または1期)に最大何人まで学生を受け入れられているか、さらに実習指導が可能な経験3年以上の理学療法士数(RPT数)をお教え下さい。

	RPT 数	併 設 校						総数
		1学年		2学年		3学年		
		総数	最大受入数	総数	最大受入数	総数	最大受入数	
平成5年度								
" 4 "								
" 3 "								

	RPT 数	併設校以外の学校						総数
		1学年		2学年		3学年		
		総数	最大受入数	総数	最大受入数	総数	最大受入数	
平成5年度								
" 4 "								
" 3 "								

7 (上記3でbとされた場合)今後の受け入れのご計画の有無などについてお伺いします。

- a あり(予定などについて: )  
b なし(理由などについて: )

8 上記の1~7で、補足することがございましたら、ご記入下さい。

- 9 附属病院での臨床実習で問題と強くお感じのこと、さらに今後改善・充実させる上で非常に重要とお考えになっていることについて、ご意見を自由にご記入下さい。  
(例：併設大学・短大教員との連携、附属病院の特殊性、部門の機構上の問題、教育業務の位置づけ、他科や病棟との連携、職員数や施設・設備、診療領域の拡大など)

アンケート(3) (作業療法部門について)

(設問1～4, 6, 8で該当するものには○印を、他には具体的な記載をお願いします。)

- 1 貴部門のうち、診療報酬の認可を得て活動されている部門を教えてください。
- a 作業療法(I)      b 作業療法(II)      c 精神科作業療法  
d 精神科デイケア(大規模・小規模)      e 老人デイケア  
f その他( )
- 2 貴部門のうち上記1のc, dをのぞく部門へ患者を依頼することの多い診療科を以下から3つ選んで下さい。
- 1)内科系  
a 一般内科      b 循環器内科      c 消化器内科  
d 呼吸器内科      e 神経内科      f 小児科  
g 精神科      h その他の科( )
- 2)外科系  
a 一般外科      b 循環器外科      c 消化器外科  
d 呼吸器外科      e 整形外科      f 脳神経外科  
g その他の外科( )
- 3 OT科臨床実習の受け入れについてお伺いします。  
a 受け入れている      b 受け入れていない。
- 4 (3でaとされた場合)この3年間の併設校の実習の有無を年次別・学年別内訳も含め、平成5年度も予定として含めご記入下さい。

	1学年	2学年	3学年
平成5年度	有・無	有・無	有・無
" 4 "	有・無	有・無	有・無
" 3 "	有・無	有・無	有・無

- 5 (3でaとされた場合)この3年間に受け入れた併設校以外の学校数(年次別・学年別内訳も含め)を、平成5年度も予定として含めお教え下さい。

	学校数	1学年	2学年	3学年
平成5年度				
" 4 "				
" 3 "				

場合によりましては、記載いただいた内容につきまして、あらためてお伺いすることも出てくるかと存じます。このアンケートをお書き下さった方のお名前などお知らせ下さると幸いです。

ご記入下さった方のお名前：

電話連絡先：

6 (上記3でaとされた場合)受け入れている領域を次の中よりお選び下さい。

- a 身体障害 b 精神障害 c 発達障害 d 老年障害

7 (上記3でaとされた場合)この3年間の受け入れた学生数(学年別)と1度(または1期)に最大何人まで学生を受け入れられているか、さらに実習指導が可能な経験3年以上の作業療法士数(OTR数)をお教え下さい。

	OTR 数	併 設 校						総数
		1 学年		2 学年		3 学年		
		総数	最大受入数	総数	最大受入数	総数	最大受入数	
平成5年度								
" 4 "								
" 3 "								

	OTR 数	併設校以外の学校						総数
		1 学年		2 学年		3 学年		
		総数	最大受入数	総数	最大受入数	総数	最大受入数	
平成5年度								
" 4 "								
" 3 "								

8 (上記3でbとされた場合)今後の受け入れのご計画の有無などについてお伺いします。

- a あり(予定などについて: )  
b なし(理由などについて: )

9 上記の1~8で、補足することがございましたら、ご記入下さい。

10 附属病院での臨床実習で問題と強くお感じのこと、さらに今後改善・充実させる上で非常に重要とお考えになっていることについて、ご意見を自由にご記入下さい。  
(例: 併設大学・短大教員との連携、附属病院の特殊性、部門の機構上の問題、教育業務の位置づけ、他科や病棟との連携、職員数や施設・設備、診療領域の拡大など)

場合によりましては、記載いただいた内容につきまして、あらためてお伺いすることも出てくると存じます。このアンケートをお書き下さった方のお名前などお知らせ下さると幸いです。

ご記入下さった方のお名前:

電話連絡先: